

フジバカマ

牧 幸 男

秋の七草の起原は、文武天皇（683～707）の時代、遣唐使の栗田真人に随行した山上憶良が詠んだ^{せとうか}旋廻歌が、今でも日本人の心に息づいている。選ばれている植物は祭祀に関係しているばかりでなく、薬用植物などで、実利性に富んだ花が殆どである。

七草の植物は、日本の在来植物が主であるが、この中でフジバカマだけは中国原産の渡来種である。フジバカマの選定に想像の域を出ないが、遣唐使が持ち帰った植物と推定されている。渡来種が選ばれた理由としては『万葉集』（629～759）に、フジバカマは一首選ばれているに過ぎないからである。渡来したフジバカマは、恐らく当時は、中国にならい薬草として取り扱われ、観賞用の対象になっていなかったのだろう。孔子（BC552頃～BC479）の死後弟子が記録した『論語』（成立ははっきりしない）にある「蘭」はフジバカマを指している。しかし後世、蘭がシナシュンランなど花に香りのある温帯性シンビジウム属の種を示すようになったことから、現在の中国では、フジバカマは「蘭草」^{ふじばかま}にしている。

一方、『日本書紀』（720）には^{いんぎょう}允恭天皇（412～453）の時代、「蘭」の名で栽培されていることが記述されているので、さらに古い時代に渡来していたのかもしれない。

特に、蘭の植物名は、東周の春秋時代（BC770～BC453）の中国最古の古典伏羲著とされている『易経』（BC8C頃?）や詩集『詩経』（BC11～BC7頃）、前漢時代の『礼記』（BC51頃）に登場しているので、中国では紀元前から生活に組み込まれていたことがわかる。我が国では、山上憶良が秋の七草にフジバカマを選定したことから、多くの人に膾炙されてきた。憶良がこの花を選んだ理由は、遣唐使として中国で過ごした時、この地で珍重されていたのを承知していたからとも言われている。フジバカマは中国原産で、彼が中国から持参したとの説もあるが、この植物に対する感心が、奈良時代（710～784）の扱われ方と中国での扱われ方に差があるので、奈良時代以前に渡来した説が正しいようである。



フジバカマの蕾



フジバカマの花弁

『万葉集』に一首登場しただけのフジバカマも、『古今和歌集』（915）には240種も詠まれるようになり、『原氏物語』（1001～1005頃）には『藤袴』の項が登場するようになった。更に、飛鳥井雅俊（1462～1453）が足利義政の講釈の記録である『古今栄雅少』（1436～1490）に、フジバカマの悲恋物語が登場し、この物語に紀貫之が「宿りせし人の形見か藤袴忘れがたき香に匂ひつつ」と詠んでいる。このように日本人には古くから親しまれてきた植物といえる。

フジバカマは、中国原産のキク科の多年草。関東地方以西の日本及び朝鮮半島、中国大陸に分布し、やや湿った草地に生えるキク科の多年草である。長い地下茎で繁殖し、草丈は1-1.5m茎は直立して株立ちになる。葉は対生で葉柄は短く、下部の葉は、3深裂、葉縁に鋸歯がある。晩夏から秋（8～9月頃）、茎の先端部分を散房状に、淡い紫紅色を帯びた白っぽい小さな花が群がり咲くので目立つ。

観賞のため栽培されたものがしばしば野生化しているため、本来の分布ははっきりしない。地下茎は長く横に這い、地上茎は多く集まって直立し、高さ一mあまり、葉は対生で下部の葉は三深裂する。葉質はやや堅く、葉面に光沢がある。花は8～9月に咲き、頭花は密な散房花序となり、花序の先端は平坦で、小花は帯紫色である。フジバカマは以前、関東以西に分布し川岸の原野に普通に生える植物であったが、川岸の開発のため現在は野生種はまれとなり、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧（NT）種に指定されている。

類似植物に沢蘭さわぼりがあるが、この植物は葉柄がなく、葉は薄くて光沢がなく、葉の裏に黒褐色の油点があるので分かる。また、丘陵や林縁に野生する山蘭ひよどりばなも、葉の裏に油点があるので区別ができる。しかし、葉に香りを持つものはフジバカマだけだ。

長旅をする蝶として知られているアサギマダラは、オスが好んでこの花に飛んでくる。まだよく解明されていないが、フジバカマに含まれる物質「ピロリジジンアルカロイド」の摂取が性フェロモンの分泌に必要なからとされている。

日本人に親しまれてきた藤袴は、詩歌によく詠まれてきた。

同じ野の 露にやつるる ふじばかま あわれ葉陰よ かごとばかりも 紫式部
香は古く 花は新らし 藤袴 藤森素榮



フジバカマ
長野県薬剤師会
薬草の森りんどうにて

植物名の和名の由来は諸説あり、花の色が藤色を帯び、花卉の形が袴のようであることから、「藤袴」の名が生まれた、また藤花香含草の意味とも、薫袴の意味から来ていると言われる。江戸時代の谷川土清著（1709～1776）の没後刊行された『和訓栞』（1777～1887）には「花の色を見て藤と称し、其弁の筒をなせるをみて袴とする。」の記述もある。その他、様々な説が伝わっており、ひとつは、「ふじ」は花の色をさし、「はかま」は帯びる意味があり、芳香があるため常に身に着けていると邪気を払うことから出た説。二つ目は、フジバカマの筒状の花を袴に見立てて藤色の袴をはいた女性を偲ばせる説。三つ目は、昔、藤長けた美女が野辺をさまよって死んだ。地域の人々が哀れみ、弔いをしようとしてよく見ると、藤のつるをさらして織った袴をはいており、そばに一本の草花がさしてあった。人々はこの女性を偲び、その花をフジバカマと呼ぶようになった説である。身近な植物だけに、多くの別名が付けられている。一部掲げると蘭らん、欄草、香蘭、香草、王者香、秋蘭、待女花、香草等がある。

学名は *Eupatorium fortunei* で、属名は BC132～BC63 年の小アジアの Pontus の王 Mithridates の姓 Eupator に捧げられた名で、彼はこの植物を薬用に使っていた。種小名は植物収集家スコットランド出身の Robert Fortune の名である。

薬用には漢方では使われないが民間薬として、生薬名を蘭草らんそうと呼び、蕾を付けたものを採取し皮膚のかゆみ、糖尿病や利尿、解熱、黄疸等に用いる。植物自体は生で香りが無いが、乾燥して生乾きになると、桜餅の葉のような芳香を放つ。このため、乾燥草を刻んで袋に入れ、ポプリやサシェのように使う。中国では、簪かんざしにしたり、香袋として身につけたりしている。香りが良いので浴用剤や頭髪を洗うのにも用いる。平安時代の女性は、藤袴の香を焚きこめて香りを身につけていた。また、武士が戦場

に行くとき、身だしなみに兜に良く藤袴の香を焚きこめたとされているが、明治時代になると日常生活にはあまり利用されなくなった。

花言葉は「あの日を思い出す」「躊躇」「ためらい」「優しい思い出」などである。



フジバカマ